

しまことば劇の効果について
 沖縄県内でのインタビュー調査から

石原昌英

1. はじめに

2017年9月に開設されたしまくとうば普及センターの初代センター長である波照間永吉氏は、演劇を通じた地域のことばの継承の可能性について、「個人的には、子どもたちが地域の民話を地域のことばで演じる演劇が継承に有効だと思う。継承の最後のチャンスと捉え、地域と連携したい」（『沖縄タイムス』2017.9.13）と語っている。地域のことば（方言）と演劇に関して、『朝日新聞』（2009年11月30日）によると、2008年に改定され、2011年に全面実施された現行の小学校学習指導要領をうけて、小学生に演劇や川柳を通して共通語と方言の違いを学び、方言の価値を理解する機会を与える取組が日本各地で実施されてようである¹。このような取組は、教育現場で、子ども達が方言劇を通して方言を学ぶことに効果があると判断されていることを示唆している。

演劇を通して外国語を学ぶことの効果については井村(2004)、米田(2008)、丹羽(2012)、西崎(2012)、安藤(2014)、川村・小林・北岡(2014)、畷(2016)などの先行研究がある。これらによると、児童生徒及び学生は、演劇に演者として参加することにより、発音・イントネーションがよくなり、人前で話すことに自信が持てるようになったと自覚している。また、参加者は、自分の台詞を覚えるだけでなく、他の演者の台詞も覚え、「会話」をしないといけないので、コミュニケーション力がついたと感じている。言い換えると、演劇は外国語能力の向上に効果があることが示されている。

外国語ではない日本国内各地のことば（方言）を演劇を通して学ぶことの効果については、「方言劇」「方言劇の効果」「沖縄芝居」「しまことば劇」などをキーワードとして

¹ 2011年施行の『小学校学習指導要領』では、「共通語と方言の違いを理解し」という文言は「第5学年及び第6学年」の「2内容 A話すこと・聞くこと」に含まれているが、平成33年4月から施行される小学校学習指導要領では「第5学年及び第6学年」の「2内容 [知識及び技能]」に含まれる。

(3) 我が国の言語文化に関する次の事項を身に付けることができるよう指導する。

ウ 語句の由来などに関心をもつとともに、時間の経過による言葉の変化や世代による言葉の違いに気付き、共通語と方言との違いを理解すること。(後略)

『小学校学習指導要領』文部科学省(2017:21)

また、平成33年4月から施行される中学校学習指導要領では、第1学年で「共通語と方言の果たす役割」について学ぶことになっている。

(3) 我が国の言語文化に関する次の事項を身に付けることができるよう指導する。

ウ 共通語と方言の果たす役割について理解すること。

『中学校学習指導要領』文部科学省(2017:15)

Google で検索をしたが、上記の演劇を通して外国語を学ぶことの効果に関する先行研究に類する先行研究は見つからなかった。

奄美・琉球諸島の地域言語（以下「しまことば」とする）を演劇を通して学ぶことと英語などの外国語を演劇を通して学ぶことには大きな違いがある。すなわち、しまくとうばは、長い間「話してはいけない言語」「継承する必要のない言語」と認識され、地域の若者の殆どが話せなくなり、その結果として、消滅の危機に瀕しているという一方で、後者（特に英語）は「国際語」「地球語」として、その習得が奨励されてきたことである。

演劇を通してしまくとうばの習得・継承に努めることは、単なる「ことばの習得」を越えるものがある。消滅の危機に瀕している言語の保存・継承の意義に関わっているからである。2017年に沖縄県で活動する演劇集団「創造」による『椎の川』（大城貞俊作・1996年）の上演があった。演出をした幸喜良秀は次のよう語っている。

観客に、しまくとうばを「いい言葉」として味わってもらうのも本公演の目的の一つだ。沖縄の言葉がなくなるという切迫感の中、私はこの演劇の「料理人」として、しまくとうばの素晴らしさを現代の人に知らせたい。／かつて沖縄の復帰運動の中で、しまくとうばが顧みられなかった時代もある。沖縄の言葉を大切にすることは、沖縄のアイデンティティを大事にすることでもある。／私たちには沖縄の言葉を教えてこなかった責任がある。だからこそ文化として回復させたい。」（『沖縄タイムス』2017.8.28）

また、『琉球新報』（2017.8.30）によると、与那原町で小学生によるしまことば創作劇の上演を指導している屋比久澄子は「消えつつあるしまくとうばを子どもたちに受け継ぎたい」と語り、劇にドラえもんが登場することについて「うちなーぐちに興味のない子どもを引きつけるためには、ちょっとでも面白くしないと」と語っている。同記事によると演者として参加した小学生（10歳）は「私が方言を話しているのを聞いて、興味を持つ友達もでてくるかも知れない。」と語っている。

本稿では、沖縄県においてしまくとうば劇に演者として参加した若者を対象としたインタビューの内容を分析し、その効果について考察する。

2. 演者として参加するしまことば劇の効果：インタビュー内容の分析

2. 1. 沖縄ハンズオン NPO の若者

沖縄ハンズオン NPO は年に複数回「しまくとうばオンステージ」の一環としてオリジナルのしまくとうば劇を上演している。また、沖縄島中部のデイケアセンターや老人ホームを訪問し、しまくとうばを母語または第2言語とする高齢者との交流を行っている。さらに、浦添市にある児童センターを委託運営し、子ども達が参加する催しも実施している。



図1 第6回しまくとうば On Stage のポスター

インタビューは図1に示した創作郷土劇「きたたんぬ座盛上人（じゃーはねーきやー）」の上演後の2017年8月17日に実施した。一人ずつではなく、集団インタビューで、できるだけ指名しないで、自由に発言できるようにした。インタビュー参加者は下記の通りである。

高校生：比嘉七星、比嘉花衣音、玉城臣之輔、久志海都

大学生・社会人：岸本 新、赤嶺龍風、神村采音、崎山倫、根間広人、新田みき、島袋里咲

同NPO理事長の安慶名達也と職員の石嶺美晴はインタビューに同席したが、若者の自発的な発言を促すためかインタビューの質問に対する答えとしての発言はしなかった。インタビューではしまくとうば劇に演者として参加するようになり、その練習・事前学習で学んだこと、しまくとうば劇に参加したことの効果等について質問した。下記にインタビューでの発言を記すが、発言者の氏名は明示していない。まず、沖縄の歴史・文化・言語に関する理解（知識）が深まるという効果である。

- (1) しまくとうば劇の背景的な知識として琉球・沖縄の歴史や言語状況についても学んだが、初めて知ることが多かった。

沖縄のことばはじーちゃん・ばーちゃんのことばだ、昔のことばだと思っていた。

自分は使えないのに、じーちゃん・ばーちゃんはなぜ使えるのか疑問に思っていた。

ここで学び始めて、自分たちのこととばなんだと思うようになった。

ここで学び始めるまでは、沖縄のことばが嫌いであったが、今は沖縄のことばをもっと学びたいと思うようになっている。

沖縄のことばがなくなることで、沖縄のこころもなくなっていくんだ、と考えるようになった。

- (2) 劇の衣装、メイク、台詞に込められている意味（思い）を知るようになり、それを自分たちが次に伝えないといけないんだ、という責任感が芽生えてきた。しまくとうばは昔のことばではなくて、自分たちのことばとして感じるようになった。それを、劇を通して伝えたいと思っている。
- (3) 劇に参加することでしまくとうばを学んだことで、民謡の歌詞の意味が理解できるようになった。意味が理解できたら、参加していたエイサーで叩いていた太鼓が歌詞の意味とあわないと思うようになり、ファッション化したエイサーに違和感をもつようになった。
- (4) しまくとうば劇の地謡として参加しているが、民謡の歌詞の意味を理解しないで歌っていたことに気がついた。前は、意味も分からずに民謡を歌っていたが、意味がわかるようになって感情の入れ方や表情が変わった。沖縄のことばは使われてこそことばであって、使わないとなくなってしまうんだ、ということを感じるようになった。
- (5) 親戚の行事（お盆など）により積極的に参加するようになった。劇から学んだ沖縄の文化が自分の周りに実際にあることに気がついた。

(1)～(4)の発言から分かることはいくつかある。まず、参加者たちは上演の事前学習として学ぶ前は沖縄の歴史や言語状況・衰退の原因について知らなかった。小学校から高校までの学校教育において住んでいる地域の歴史・文化・言語について学ぶことはほとんど無かったのである。また、しまくとうばが「生きたことば」であり、祖父母が話している「昔のことば」でなく、「自分たちのことば」としても機能するということを実感している。自分たちのことばであると実感できるようになれば、それを次の世代に伝えないといけないという意欲と責任感がでてきている。(3)と(4)については、沖縄県において盛んに行われている芸能活動に関する疑問・反省が述べられている。劇を通してしまくとうばを学び、沖縄の芸能文化をより深く理解できるようになった。その結果、自分がそれまでやっていたことが表層的なものであったことを認識したのである。(5)は興味深い気づきである。劇

で学ぶ前もお盆などの親戚縁者が集まる行事に参加していたが、その意味・意義をあまり理解しようとはしなかった。ところが、劇を通して沖縄の行事を再認識することにより、その意味（価値）を理解したので、より積極的に参加するようになったのである。

次に、劇に参加したことは、しまくとうばを母語または第2言語とする高齢者との交流が深まり、それが若者達の言語意識をさらに高まるという相乗効果をもたらしたことがわかる。

- (6) 劇を通して学んだことばを慰問している老人ホームやデイケアセンターで使い、高齢者からさらに学んでいる。
- (8) 老人ホームでより適切な敬語を教えてもらっている。
- (8) 劇で学んだしまくとうばをひーばーちゃんや老人ホームの高齢者に使うようになったら、おばーちゃんたちが私に話す内容が変わってきた。私がしまくとうばを話すようになって、おばあちゃん達がより深いところまで、自分たちにたいしてところを開くようになったと感じている。まえばは沖縄に住んでいるので沖縄人だと思っていたが、「沖縄人」をより深い意味で考えるようになった。
- (9) 自分のおじーちゃん・おばーちゃんのことを知りたくなって、より話すようになり、あたらしい表現を教えてもらっている。
- (10) 母親が祖母としまくとうばを使っているが、私にも使うようになった。生活にリンクしていることを感じるようになった。語彙とか表現が豊かになった。
- (11) しまくとうばの多様性を実感として学んでいる。

老人ホームやデイケアセンターで劇を通して学んだしまくとうばの表現を使い、それに高齢者が反応しているということは、劇に参加した若者達にしまくとうば能力がついていることを示している。若者達は、自分たちがしまくとうばで高齢者に話しかけ、それに反応した高齢者から別の表現等を学ぶことにより、しまくとうば能力がさらに向上していると感じている。(8)は劇で学んだしまくとうばが高齢者とのより深い「心の交流」をもたらし、それが若者の沖縄人意識（アイデンティティ）の再認識につながっていることを示している。しまくとうばを学び使うことは、若者にことばとは何か、自分とは何かを気付かせる効果があるのである。(9)と(10)は、若者がしまくとうばを学び使うことにより、家庭内での言語使用がより豊になることを示している。父母・祖父母のみが使っていたしまくとうばを、若者も家庭内で使うようになり、若者は父母・祖父母からあたらしい表現・語彙を学び、しまくとうば能力がさらに高まるのである。発言者は「生活にリンクしている」と表現しているが、まさに「生きたことば」となっている証であろう。

次に、若者のしまくとうば使用についてであるが、参加者のグループ内では簡単なフレ

ーズを使うようになってきている。しかし、グループ外ではしまくとうば使用のハードルはまだ高そうである。

(12) メンバー間では、「まーんかい ういが (どこにいるの)」などのフレーズを使うようになってきている。妹もハンズオンに参加しているが、妹と二人が使うようになった。四人家族なので、今は使わない両親も使うようになるかも知れない。

(13) 高校の友達に劇の告知をすると「何の役に立つの」と訊かれて、落ち込んだ時もあったが、今は、このような友達をどう巻き込んでいこうかと考えるようになった。

上記のようにしまくとうばを学んだ若者と異世代(父母・祖父母世代)の間ではしまくとうばを介したコミュニケーション行為が起こっている。しかしながら、しまくとうばを学んだ若者とその他の若者(おそらくしまくとうばを学んではいない)の同世代間では、しまくとうばが使われることはないのである。このことは沖縄県におけるしまくとうば復興の課題であろう。保存継承の担い手となる若者の関心を高め、彼・彼女らがしまくとうばを少しでも使うようになるにはどのような取組が必要となるのかを検討し、それを実施することが求められている。インタビューに答えた若者のなかには本屋でしまくとうばに関する本を見たり、買ったりするようになった者もいる。一旦関心が芽生えれば、自ら学ぶようになるのである。この点を考えても、どのようにして関心を持たせるかが課題となる。

最後に、沖縄ハンズオン NPO の若者達がハワイで沖縄の言語・文化の継承に取り組んでいる御冠船歌舞団(うかんしんかぶだん)に招待されしまくとうば劇を上演したことについて述べたい。Ishihara (2007)で述べられているように、1900年に沖縄からハワイへ移住が始まった。沖縄系は現在では5世・6世も誕生しているが、コミュニティの結束が強く、沖縄県人会は日系人会のなかでも最大級の組織で、沖縄の言語・文化に関連する活動も活発に行われている。しかし、ハワイのアメリカ社会及び日系社会の中でマイノリティであった沖縄系の2世・3世の殆どが祖父母のことばを継承することはなかった。ハワイにおいても、沖縄語は「継承する必要(価値)のないことば」であると見なされていたのである。現在では沖縄県人会やハワイ大学で沖縄語や琉球芸能(唄三線・舞踊・琉球琴)が教えられ、祖先の言語文化を学ぶ沖縄県系人も増えてきている。このような状況で沖縄ハンズオン NPO がハワイに招待され沖縄系移民をテーマにしたしまくとうば劇を上演したのである。インタビューで、「ハワイで沖縄文化の継承に努めている団体に招待されて劇を上演したが、ハワイの沖縄系の人達の思いを感じて、沖縄の私たちが学ぶ意義を知った。」という発言があった。自分たちの学びは沖縄を越えて、沖縄の若者が演ずる劇を通して、ハワイの沖縄系コミュニティが自らの歴史を学ぶ機会を与えたのである。また、沖縄の若者達は、沖縄でしまくとうばを保存継承することは、沖縄のためだけではないことを認識したのである。

2. 2. ハワイの沖縄系4世

米国ハワイ州ヒロ市(ハワイ島)出身の沖縄系4世である Samantha Akemi Maesato に

インタビューした²。彼女は、高校卒業後、東京の大学に留学したがそこではしまことばに触れる機会はなかった。大学卒業後2年前に琉球大学で学ぶために沖縄に来た。琉球大学の学生サークルで1年半分くらいしまことばを学んだ。しまくとうばを学び始めたのは、沖縄から移住してきた曾祖父母たちが使っていた沖縄語に興味があったからである。自分のしまくとうば能力をさらに向上させるために、宜野湾市うちなあぐち会が2017年8月から11月にかけて実施した「うちなーぐち市民講座-芝居を通してうちなーぐちを学ぼう-」に参加した。その講座でもしまくとうばを学び、しまくとうば劇の上演に役者として参加したが、台詞は少なかった。

Maesato はインタビューで次のように語った。

- (14) 2名の講師は日本語で芝居を教える。
- (15) 講座の前半はしまくとうば表現について学び、後半は劇の上演に向けた練習をした。
- (16) 語学の指導はないので、初心者では難しいと思う。
- (17) 文法について学ぶことはなかったが、琉大のサークルで学んである程度の基礎はできていたので、一から始めると言うことではなかった。
- (18) 参加者の多くは60代から70代で、自分から話すことはできても、聞くことはできない。その人たちに発音とイントネーションを教えてもらった。
- (19) 60代70代の参加者たちは、反省会で「自分から自由に表現できるようになった」と語った人たちが複数名いた。講師の先生も、参加者が表現力がついてすらウチナーグチがでるようになったと言っていた。
- (20) 自分の台詞は少なかったが、他の人たちの台詞を聞くことによって、本とか資料とかでは学べなかった、自然な会話、生きたことばを学べるようになった。
- (21) 一番、効果があったのは講座の指導者や参加者から発音・イントネーションを教えてもらったこと。語彙も増えた。本とか資料とかでは発音・イントネーションは学べなかった。
- (22) 芝居で覚えた表現を使うようになった。琉大のサークルでも芝居で覚えたことばを使うようになった。
- (23) 芝居の仲間達と話す時は日本語であった。私がウチナーグチで話しても、日本

² 氏名を出すことは本人の了承を得ている。

語で返してくる。講師の二人も、私とウチナーグチで話しても、途中から日本語になる。

(14) については、しまことば劇の指導者は、しまことばを使って指導することが理想的ではあるが、参加者はしまことばを学びに来ているので、台本を通して発音・イントネーションで教えることで参加者が自信を持って発話できるようにする（後述）を優先すべきであろう。(15)～(17)の発言は、しまくとうば劇は、ある程度の言語知識を習得してから参加する（させる）のがより効果を高めることを示唆している。全くの初心者として参加するのではなくて、劇の練習に入る前に、ある程度の言語学習をするということである。沖縄県においては、しまことば講座を開設している公民館は、講座の成果を示すためにしまことば劇を上演することが多い。(18)と(19)は、しまことば劇に参加することが、40代以上に多いとされる（琉球新報 2012, 2017）、「聞けるけど話せない」いわゆる受動的母語話者が「話す」ようになる効果があることを示している。聞いて理解することはできるので言語知識は有しているが、話す機会がなくて、話せなかった（話せないと思っていた）者が自発的に話すようになったのである。このような参加者はこれ以降も日常生活においてもしまことばを使うようになることが予想できる。このような効果は消滅の危機に瀕した言語の保存継承に関して重要なことである。話者数が増えることになるからである。また、話者数が増えることは、しまことばが生活言語として使われることが多くなり、話者数がさらに増加することが期待される。

(20)と(21)については、外国語習得における劇を通じた学びの効果に関する上記の先行研究でも述べられている。母語話者または母語話者に近い言語能力を有する者から正しい発音・イントネーションを教わることで自信を持って声を出すことができるのである。劇では自分の台詞だけでなく、他の演者の台詞も覚える必要がある。また、実際に自分以外の台詞を聞くことによって「聴く力」が向上する。劇では台詞が会話としてつながるので、自分が発話し、他人にことばを聞くことによって「生きたことば」を学ぶことができるのである。

トウルバイオノ
 払てい呉みそーれ。
 (五万田分買いました、払ってください)
 やまー
 うさぎーなー魚食たる人ぬ居か
 (そんなに魚食った人がいるか)
 魚屋
 今日集金しないと、クビないびーん…(首になります)
 やまー
 クビ！なれー！
 魚屋
 何うんで云みせーが、払てい呉みそーれ。
 (何て事をおつしやる、払ってください)
 やまー
 分かった、今ー無ーんぐとう、十時にみぐてい来ーわ。
 (今は無いから十時に来なさい)
 魚屋
 本当やいびーらや、十時に必ず払てい呉みそーりよ。
 (本当ですよ、十時に必ず払ってくださいよ)
 やまー
 払いさ、払いさ、心配さんけー。(帰る)
 (払う払う、心配するな)
 野菜屋
 やまーさん、ちやーびらさい。(中に入る)
 (居るのに返事もしないんでや。
 (居るのに返事もしないんでや)
 やまー
 人ぬ家んかい、黙てい入ーる人ぬうみ。
 (人の家に黙て入る人がいるか)
 野菜屋
 合図しん返事しみそーらんぐとうてーや。
 (呼んでも返事もしないから)
 奥さー居いびーみ。
 (奥さん居ますか)
 やまー
 うらん。(居ない)

図2 「盗人やまー」の台本

第一景 チルルーの家
 ※アンマー板付きでお茶を飲んでる。(木戸を開ける)
 次良
 へいなーアンマー、アンマーや家んかいめーみな、(木戸を開ける)
 アンマー
 あい、次良どうやえーきに、内んかい入れー。
 次良
 内んかい居てーさやー、いはいばーやてーさ、入らうー。
 アンマー
 汝ー一人どうやんせーるい、チラーや…。
 次良
 汝ー一人や潮ぬ引ちよーぐとうんでい、い、浜んかいアーサー取いがんでい
 うち行ちゆたん。
 アンマー
 我んにん追付き行ちゆんちどうやんでー。何うが何うしがちやが。
 次良
 実えよーな、今日やアンマーんかい、頼みぬあてどう来やんでーな。
 アンマー
 頼み：頼みんてい言うしが、何うが何うやが。
 次良
 …実えよーな、汝ーん知つちよんせーる通い、
 我んねー、幼少からクマーマークーぬボーチラーなてい丈いーていから
 んうぬ縣ー治ーらん、常時友ぬ達ーとうん喧嘩ていーえーぬ果てーねー
 らん友失なてい…
 アンマー
 うりに村ぬ人ぬ達ーん我ん顔見でー、道くんまーち逃ぎてい行ちゆい…
 汝ーが云うる通いや、村ぬ人ぬ達ーん汝ー恐るさつし、誰ーん物言ーせ居

図3 「恋時雨」の台本

Maesato は二つの劇に参加したが、台本の形式が異なっていたようである。図2が示すように「盗人やまー」の台本では台詞に日本語訳が付され、一方、図3が示すように「恋時雨」では、台詞はしまくとうばのみで記されている。Maesato は「盗人やまー」のほうが台詞を覚えやすかったと述べていた。意味を理解して覚え、発音・イントネーションは指導者や他の演者に教わり覚えることができたからである。一方、「恋時雨」については、わからない語彙や表現の意味を、指導者や他の演者に教えてもらい、それから発音・イントネーションも覚えたようである。しまことばに堪能でないものが、限られた時間で台詞を覚えるには、日本語訳が付されていた方が効果は高そうである。

(22) と (23) については、劇を通して学んだしまことばを当該の劇以外で使う機会があるかどうかの課題である。Maesato によると、受動的母語話者であった参加者は、劇以外の機会ではしまことばを使うことが多くなっていたようである。しかし、彼女に対しては、講師も他の参加者も日本語で話すことが多かったようである。(23) にあるように、しまことばで話し始めても、途中から日本語に変わっていたということであるが、より高い能力を有する者の寛容さが必要とされるだろう。

3. まとめ

上記の二つのインタビューからしまことば劇に関する言語継承の効果として見えてきたことは下記の通りである。

- 1) 方言劇に参加することの効果はある。しかし、その効果がでるためには事前学習を通して劇の内容についての歴史的・文化的背景を学ぶ「準備」が必要である。
- 2) 台本の読み合わせに入る前にある程度の「方言講座」を実施し、初心者が方言に関する知識を持てるようにする。
なお、沖縄県において実施されている「方言講座」では、前半を方言指導、後半を成果発表の場として方言劇の上演をしているものが多い。
- 3) 台本は方言-日本語版と方言版の二種類が可能であるが、初心者は前者を使った方がよい。
- 4) 方言に堪能な演者は積極的に発音指導（イントネーションを含む）を行う。
- 5) 「聴けるけど話せない」という「受動的母語話者」は、劇に参加して話せるようになった者が多い。このような人達を劇の役者とすることで少しずつ話者数が増えるかもしれない。
- 6) 若者の参加を奨励する。ただし、方言に関する知識を習得する機会も与える。方言劇に参加する若者は方言への関心が高い。
- 7) そのような若者は、方言を祖父母だけのことばではなくて自分のことばとして認識するようになる。
- 8) 親戚が集まる機会に高齢者と方言で話ができるようになり、喜ばれている。
- 9) 劇に参加した高校生が、クラスメートに方言で話しかけたら「何の役に立つの」と言われている。若者は意識改革が必要かもしれない。そこは国語科目の新指導要領が大きな役割を持つだろう。

また、しまことば劇に参加することは、しまの言語を学ぶ機会であるが、しまの歴史・文化を学ぶ機会でもある。沖縄ハンズオンの若者達の意識の変化は、ことばの継承という効果だけでなく、言語を媒介とする文化やアイデンティティの継承にもしまことば劇が有効であることを示している。

参考文献

- 『朝日新聞』（2009年11月30日）「方言、劇で川柳で学ぶ 小学校で重点化 取り組み多彩」
- 安藤栄子（2014）「英語劇を取り入れた授業の効果」『国際関係研究』（日本大学紀要）35(1):41-49.
- 井村哲也（2004）「英語ドラマ活動は、中学生の英語習得・英語学習にどのような影響を与えるのか」日本英語検定協会 *STEP BULLETIN* 16: 197-210.
- 『沖縄タイムス』（2017年8月28日）「沖縄の心紡ぐ家族愛 演劇集団「創造」第39回公演「椎の川」初の全編しまくとうば」
- 『沖縄タイムス』（2017年9月13日）「しまくとうば振興図る 県庁に普及センター設置」
- 川村一代・小林ゆかり・北岡美代子（2014）「オリジナル劇の実践から見えてきた外国語活動の進め方-“Hi, friends! 2” Lesson 7の3つの実践をもとに-」『小学校英語教育学会誌』14: 4-19.
- 暇 絵里（2016）「『語劇』による教育効果の多様性」『人間文化研究』（桃山学院大学紀要）5:57-85。」
- 西崎有多子（2012）「小学校外国語活動における『桃太郎』をつかった授業展開-英語劇化への過程と民話としての側面-」『東邦学誌』（愛知東邦大学紀要）41-3:1-21.
- 丹羽佐紀（2012）「劇を取り入れた英語授業の試みについての一考察：効果と課題をさぐる」『鹿児島大学教育学部教育実践研究紀要』22:75-81.
- 文部科学省（2017a）『小学校学習指導要領』
- 文部科学省（2017b）『中学校学習指導要領』
- 米田佐紀子（2008）「英語劇を通して日本人児童に英語力を定着させる試み-コミュニケーション能力からみた発音・語彙・文型の定着を目指して-」『北陸学院短期大学紀要』40:65-84.
- 『琉球新報』（2017年8月30日）「しまくとうば継承したい 小学生が創作劇披露へ」
- Ishihara, Masahide (2007) Linguistic Cultural Identity of Okinawans in the U.S. In Joyce N. Chinen (ed.) *Uchinaanchu Diaspoa: Memories, Continuities, and Constructions. Social Process in Hawai'i* 42:231-243.